

## 「モチベーション論から考えるゼミの武蔵の問題点」

経営学科 4 年

笹田 裕嗣

### <論文の要旨>

本論文では、モチベーションに関する既存研究の検討を通じて、人々の動機に影響を与える要因として「自己」「他者」「活動」の 3 点を抽出し、この視点をもとにして「武蔵大学におけるゼミ活動」に関する質問票調査を行い、分析を行った。

まず、本論文では動機づけの要素がなぜこの 3 点に分けられるのかについて論じている。動機づけについてはこれまで多くの議論がなされてきた。その中で、多くの動機づけ理論の基礎になっているのが、マズローの欲求階層説である。そして、この理論を私は「自己」の視点と「他者」の視点に分類できるとした。そして、「自己」の視点においては、いかにその活動に価値を見出し、積極的に取り組む態度である「コミットメント」が重要である。また、「他者」の視点においては、欲求階層説の「社会的欲求」「尊厳の欲求」を満たすには、他者から認められるという「承認」が不可欠である。また、これらの「自己」「他者」による動機づけにおいては、実際に活動が行わせて初めて満たすことができる。そして、「活動」を起こすには、何かしらの目標の存在があり、この視点においては「目標」が重要である。

そして、ここまでで明らかにした「自己」「他者」「活動」の視点をもとに質問調査を行った。この質問票調査から得られた主要な知見は、各々視点から一つずつ挙げられる。「自己」の視点においては、有能感、つまり自分自身ができるという感覚が現在の武蔵大学の学生には欠如していることである。結果、コミットメントが弱められてしまっているのである。次に「他者」の視点においては、「行動」の「承認」の必要性である。武蔵大学の学生は、「行動」の「承認」を求めており、またこのような「承認」が学生のやる気を高めることが明らかになっている。最後に「活動」の視点においては、「目標」の欠如が挙げられる。現在の武蔵大学の学生は 6 割以上の学生が目標を持っていない。また、目標を持っている学生も何のためにという「目的目標」と何をやるかという「標的目標」が混在している。つまり、ゼミの武蔵の問題点は、「有能感」「行動の承認」「目標」の欠如である。

### <キーワード>

コミットメント・承認・目標